

III 飛鳥地域の調査

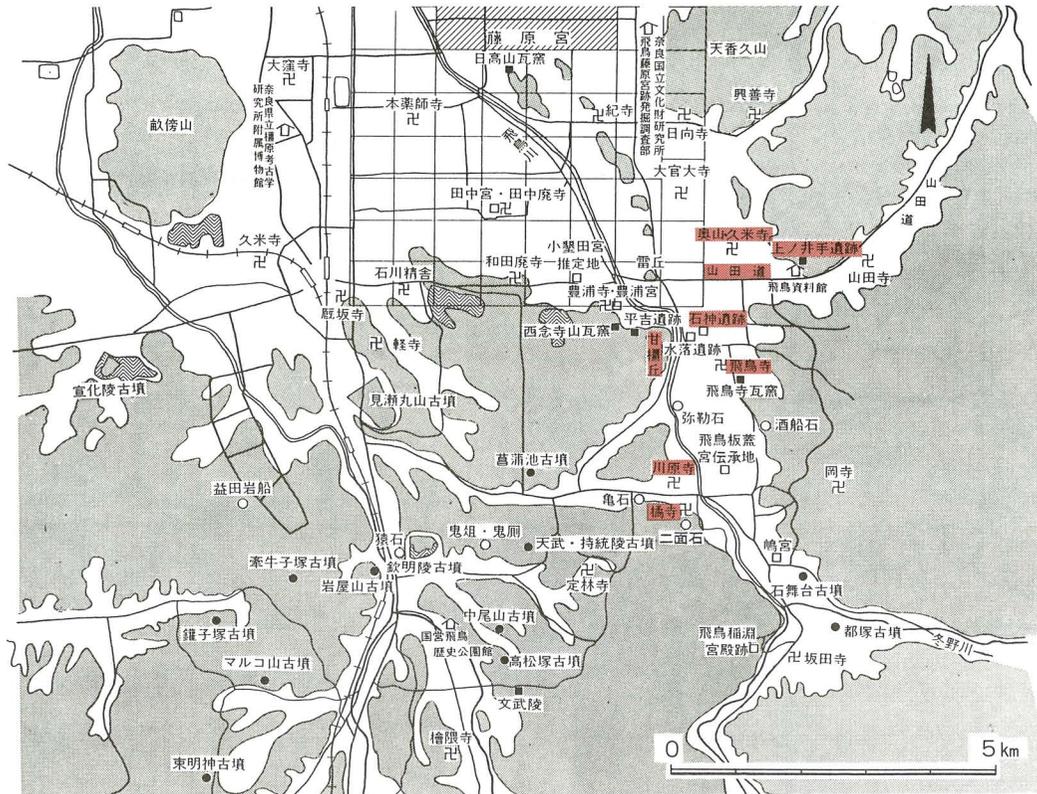


Fig.33 飛鳥地域の調査位置図 (調査地はセピア)

調査次数	調査地区	面積	調査期間	調査地	所有者等	担当者	概報頁
奥山久米寺 1992-1次	5 BOQ-N	25㎡	93. 2. 8 ~ 2.12	明日香村奥山 字西垣内671	米田誠宏、住宅改築	大脇 潔	111
川原寺 1993-1次	5 BKH-C	9㎡	93. 5.24 ~ 5.26	明日香村川原884	中井高繁、住宅建替	佐川正敏	112
川原寺 1993-2次	5 BKH-A	83.5㎡	93.12. 7 ~94. 1.27	明日香村川原	関西電力等、電線等埋設	花谷 浩	未収録
川原寺 1993-3次	5 BKH-G	1㎡	94. 1.13	明日香村川原876	河合義照、住宅増築	村田和弘	未収録
橘寺 1993-1次	5 BTB-C	4.1㎡	94. 1.26, 2. 7	明日香村橘字北ノ門	関西電力等、電線等埋設	花谷 浩	未収録
飛鳥寺 1993-1次	5 BAS-A	36㎡	93. 5.31 ~ 6. 8	明日香村飛鳥668	奥田晴久、住宅建替	佐川正敏	109 ~110
飛鳥寺 1993-2次	5 BAS-A	77㎡	93. 6. 8 ~ 7.14	明日香村飛鳥692	来迎寺、庫裡改築	佐川正敏	101 ~108
山田道 第6次	6 AMC-U・N 6 AMH-F	282.5 ㎡	93. 7. 9 ~ 7.30	明日香村雷・奥山	奈良県、道路拡幅	深澤芳樹 佐川正敏 伊藤 武	113 ~118
石神遺跡 第12次	6 AMD-T・U	730㎡	93. 7.26 ~94. 1.19	明日香村飛鳥字唐木	明日香村、調査計画	橋本義則	119 ~130
上ノ井手遺跡 1993-1次	5 ZLK-F	2.5㎡	93.10. 5 ~10. 6	明日香村奥山601	国有地、飛鳥資料館増築、立会	本中 真	132
71-11次 (甘樫丘東麓)	6 AKG-M・N	72㎡	93.12.20 ~12.23	明日香村川原	国有地、駐車場建設	金子裕之	131
71-12次 (甘樫丘東麓)	6 AMK-D	73㎡	94. 1.10 ~ 1.12	明日香村豊浦	国有地、登山道建設	金子裕之	未収録

Tab. 6 飛鳥地域の調査一覧

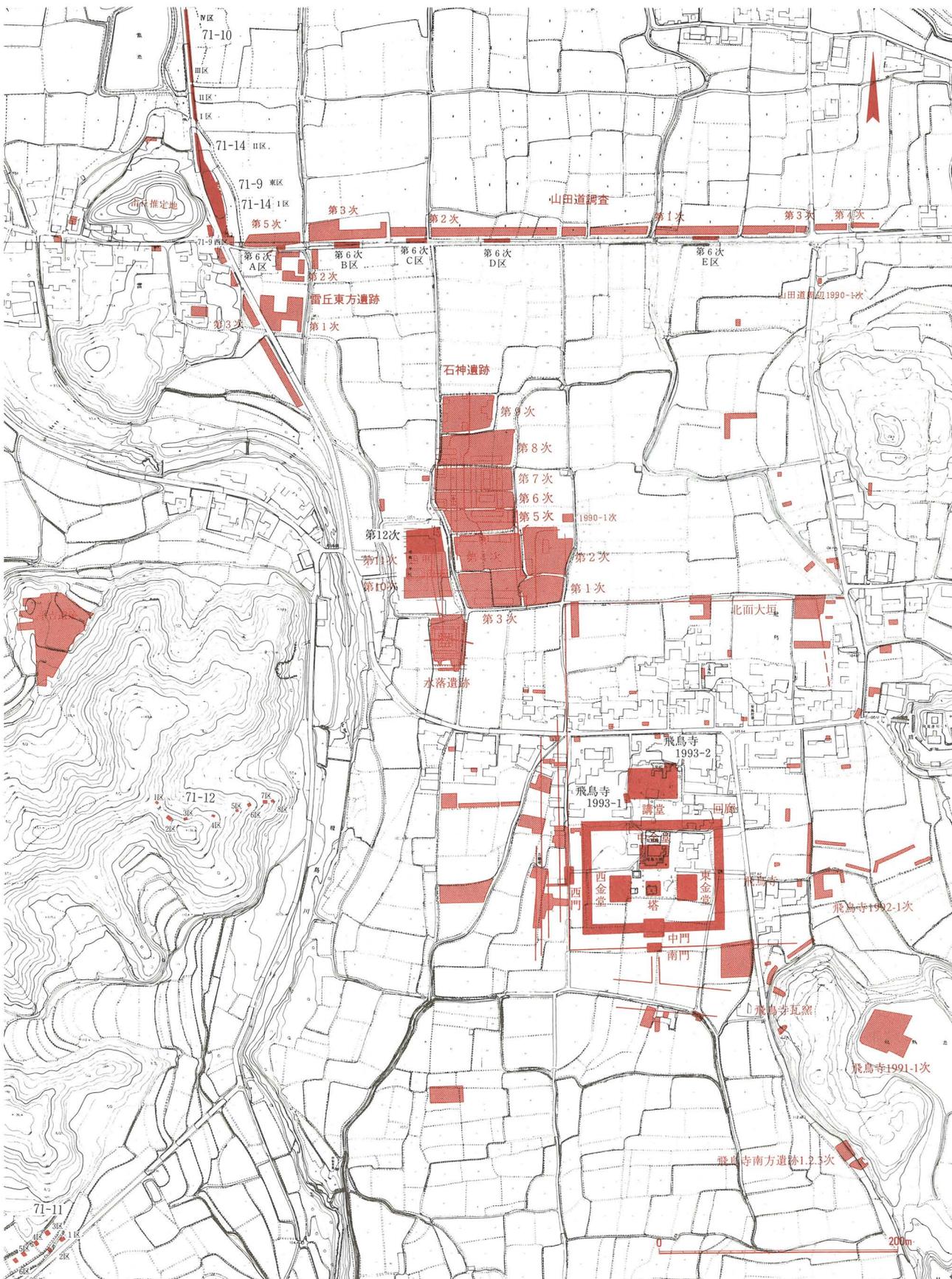


Fig.34 飛鳥寺・石神遺跡周辺調査位置図

1 飛鳥寺の調査

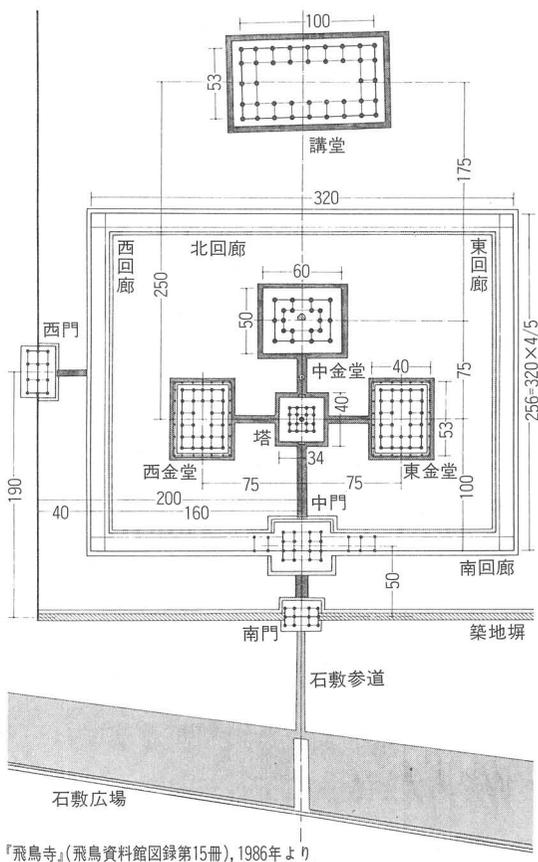
A 1993-2次調査

(1993年6月～7月)

この調査は明日香村来迎寺の庫裡改築に伴うものである。改築予定地が飛鳥寺講堂の東北隅に位置することから、地下遺構の状況の確認を目的として調査を実施した。調査面積は77㎡である。

1993年は奈良国立文化財研究所創立40周年にあたる。創立後まもなく1955年に実施された平城宮跡第1次発掘調査（第二次大極殿院回廊東南隅）に引き続き、1956～1957年に行われたのが飛鳥寺の発掘調査（以下「第1次調査」）であり、講堂もそのひとつである（『飛鳥寺発掘調査報告』1958年）。それによ

って来迎寺は飛鳥寺の講堂に位置することが判明している。調査によって知られる講堂は、桁行8間、総長35.15m（高麗尺100尺）、梁間4間、総長19m（高麗尺53尺）の、四面庇付き建物で、その規模は飛鳥寺中最大である（Fig.35・36）。講堂の基壇外装は花崗岩製玉石積みで、規模は東西43m、南北26m、高さ約90cmであり、その周囲には幅1.5mの石敷犬走りがある。基壇上では7個の花崗岩製礎石が発見され、これらのうち1個が現在も地表面に露出している。今回の調査に先立って、この中心の国土座標を計測した。これに基づくと、本調査地は基壇北辺の東寄りにあたることが予想された。



『飛鳥寺』(飛鳥資料館図録第15冊), 1986年より

Fig.35 飛鳥寺伽藍地割復元図 (1:2000, 単位は大尺)

また今回の調査に際しては、第1次調査で残された課題も解決する必要がある。ひとつは講堂の中軸線が中心伽藍の計画中軸線に対して西に $1^{\circ} 33' 44''$ 振れる、という見解の検証である。つぎに第1次調査では行わなかった講堂基壇の断ち割り調査を今回実施して、掘り込み地業の有無や基壇版築の状態を明らかにすることである。さらに講堂の犬走りの外側の生活面についても、今回初めて調査した。

飛鳥寺講堂の遺構

調査の結果、予想どおり講堂基壇の北辺東寄りが姿を現した(Fig.37)。

基壇 基壇は現地表面から20cmで確認した(P L.14)。基壇断ち割り調査によれば、基壇は掘り込み地業がなく、北に向かって緩傾斜する古墳時代の暗茶褐色土層の上に、付近から削った暗茶褐色土と黄灰色微砂(地山と推定)を交互に積み上げ、築成していた。調査中に基壇土を削った感触では、その突き固め方は明らかに弱い、外見上は版築を意識した仕事といえる。基壇土には瓦片や凝灰岩碎片が含まれていた。なお、調査区西壁と基壇断ち割りの土層観察によれば、基壇外装石の内側で、暗茶褐色土層上面に東西方向の溝S D 879(上幅30cm、深さ10cm)が走る可能性がある(Fig.40)。これは講堂基壇の位置を示すために、構築に先立って掘られた計画溝かもしれない。

基壇外装 基壇外装は従来の調査と同じく花崗岩の玉石積みで、調査区西端の3石が現位置、あるいは現位置に近い状態にあった(S X 877)。しかし、ほかの石は抜き取られ、抜き取り穴には花崗岩の薄皮が残っていた。基壇外装は基壇築成後に基壇縁を削り、大型の石を平坦面を外側に向けて1個立て、石と基壇土の間に土や拳大の石を裏込めとして入れる手法をとっている。基壇縁を削った裏込め部分は、平面的にも東西に帯状に通る。基壇上面は削平されていたが、基壇土は外装用石の上端の高さまで残っていた。第1次調査においても、礎石が現位置を保っていた講堂西北部では、敷石などは確認されていないし、今回の調査で埴が5点出土したが、敷いてあったと考えるには少なすぎる。したがって、基壇上面は土間の可能性が高い。

なお図面上では基壇東北隅が検出できると予想されたが、基壇土は低くなり

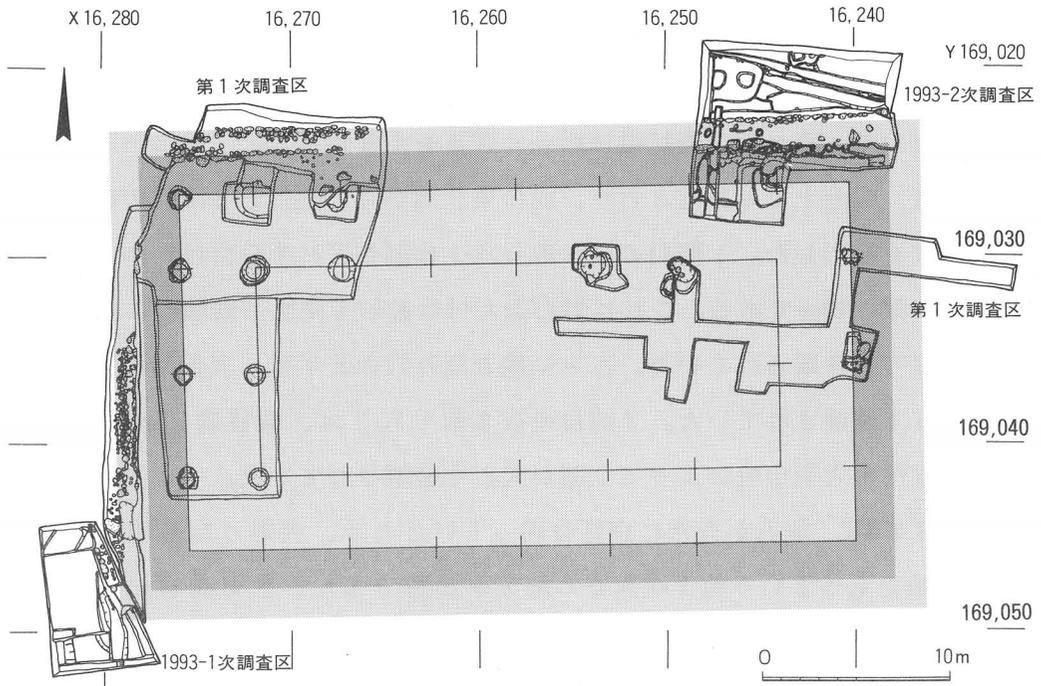


Fig.36 講堂と調査位置図 (1 : 400)

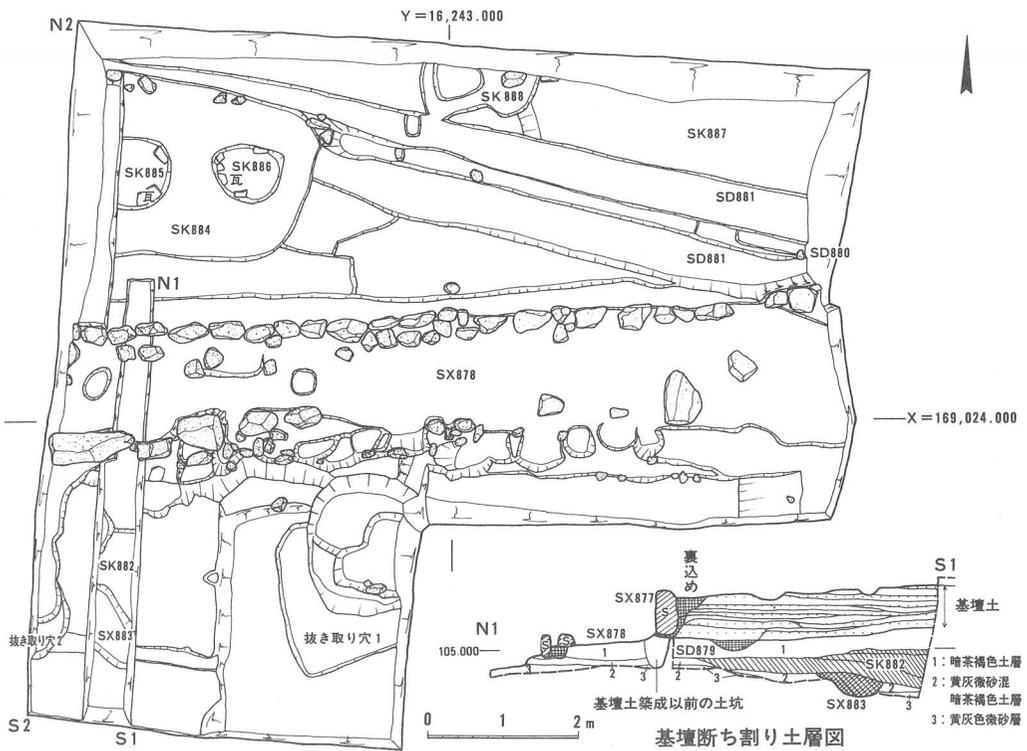


Fig.37 飛鳥寺 1993-2次調査遺構図 (1 : 100)

ながらもさらに東へ延びており、外装用石の抜き取り穴の南への曲がりも確認できなかった。基壇東北隅を間近にしなから、調査区東端には水道管が埋設されていたので、東への調査拡張は断念せざるをえなかった。

礎石位置 図面上での推定どおり、庇の東北隅から1間目と2間目の礎石の抜き取り穴を検出した。1間目の抜き取り穴1は調査区に半分だけかかり、直径約2m、深さ40cmである。これは礎石据え付け掘形を完全に破壊し、礎石と根石もすべて抜き取られていた。さらに抜き取り穴の北半は、大正時代以後の土坑によって破壊されていた。2間目の抜き取り穴2は、直径約1.5m、深さ80cmで、近代の大型土坑によって上部が大きく破壊されていた。

犬走り S X 878 縁石が非常に良好に残っていたので、犬走りは基壇外装から1.5mの幅をもつという第1次調査の結果が追認できた。また講堂の中軸線が南門から中金堂の中軸線に対して西へ振れており、第1次調査の見解が検証できた。縁石の内側の石敷はほとんどはずされていた。縁石は古墳時代の暗茶褐色土層を若干削り、外側に平坦面を向けて立てられていた。縁石の上端のレベルからみて、その内側の石は暗茶褐色土層上面に直接敷かれていたといえる。この土層は北側に向かって若干傾斜しているので、かつては犬走りの上面も同様の緩傾斜をもっていただろう。犬走りの外側に雨落溝はなく、雨水は自然に北へ流れていたことになる。なお犬走りの縁石から北へ約25cmのところで暗茶褐色土層を削り、10cmの段差をつけているが、機能は明らかでない。

飛鳥寺講堂の創建と修理

創建 講堂は伽藍中軸線に対して若干の振れをもつものの、講堂も含めた伽藍配置は大局的にみれば、塔を基準に高麗尺完数値で整然と設計、造営されている。また塔と金堂の切石積基壇に対して、講堂は玉石積基壇である点は、格付けの差とみられている。したがって、講堂の造営が塔や金堂より極端に遅れたものではない、というのが見解の大勢を占めている。

後述する基壇北側の厚い整地層を主体に、コンテナ430箱分の大量の瓦がみつかった。これらのなかには、本来講堂に葺かれていたものがかなり含まれていると考えられる。まず、軒丸瓦をみるならば、飛鳥寺創建期の単弁蓮華文軒

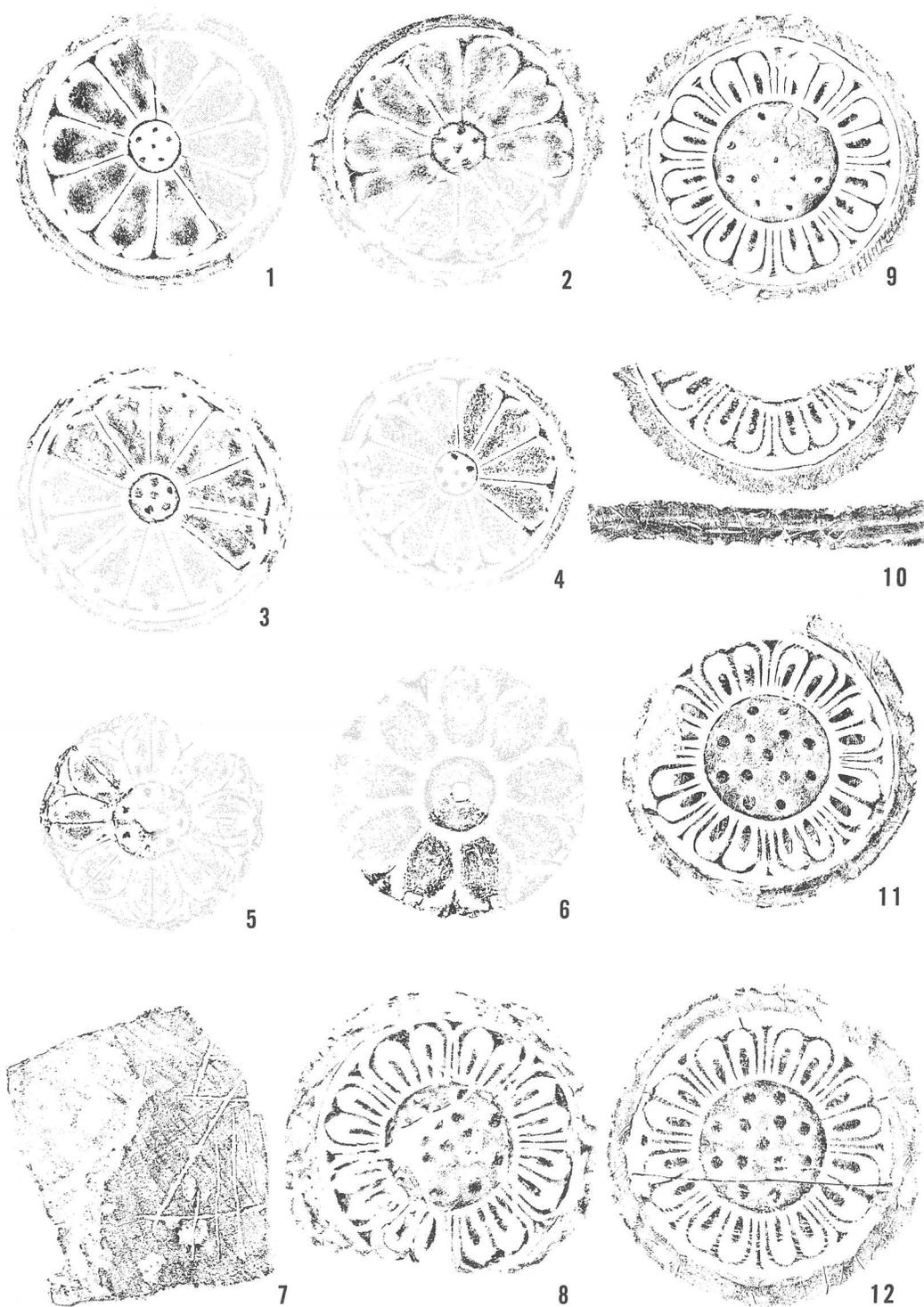


Fig.38 飛鳥寺 1993-2次調査出土瓦① (1 : 4)

丸瓦には19点の I 型式 a (Fig.38-1)・b 類(2)を主体に若干の III(3)・IV(4)～VI型式がある。したがって、講堂創建は『飛鳥寺発掘調査報告』で指摘したように、単弁蓮華文軒丸瓦を屋根に葺いた6世紀末～7世紀初頭といえる。

なお飛鳥時代の軒平瓦がないので、創建時は軒平瓦を葺いていないという従来の見解を裏付けた。極先瓦(5・6)も出土したが、単弁蓮華文軒丸瓦の点数に比べて少なすぎるので、講堂用であったとは断定できない。このほか建物を籠書きしたと思われる平瓦もある(7)。

修理 複弁蓮華文軒丸瓦にはXIV型式(9～12)41点を中心にXII(8)・XVI(Fig.39-13)型式が3点あり、これらが軒丸瓦の大半を占めている。これによって、奈良時代初頭に大規模な瓦の葺き替えが行われ、その際、複弁蓮華文軒丸瓦XIV型式を用いた、ということが判る。これに対して軒平瓦は、軒丸瓦XIV型式に組み合わせるべき軒平瓦が1点もなく、大官大寺創建軒平瓦6661BであるIV型式(14)が2点、平安時代前期のVI型式(15)が5点あるにすぎない。したがって、講堂では軒平瓦を創建以来一貫して葺かなかったといえよう。さらに平安時代中期

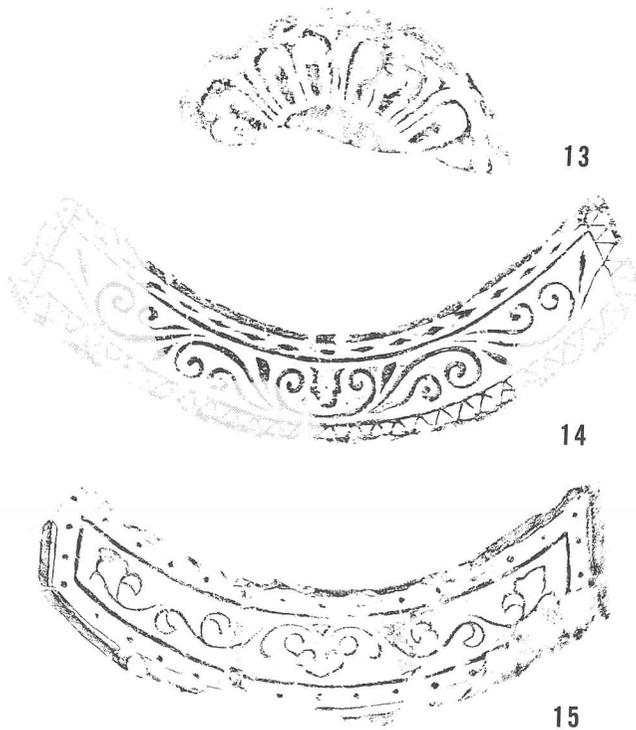


Fig.39 飛鳥寺 1993-2次調査出土瓦②(1:4)

軒丸瓦	I a	4	} 5 (19)
	I b	1	
	III	2	
	IV	1	
	V	2	
	VI	1	
	XII	1	
	XIV a	3	} 4 (41)
	XIV b	1	
	XVI	2	
近世～近代巴文	3		
小計	21 (72)		
軒平瓦	IV B (6661 B)	2	
	VI	5	
	近世～近代軒平	3	
	小計	10	
軒瓦合計		82	
道具瓦他	極先瓦	2	
	埴	5	
	鴟尾	1	
	籠書き丸瓦	1	
	籠書き平瓦	2	

() 内は種別・型式不明を含む

Tab.7 飛鳥寺 1993-2次調査出土瓦点数

に属する凹面の布目痕の粗い丸瓦と平瓦もあるので、平安中期までは小規模の屋根修理が行われ、講堂が建っていたようである。犬走り北の大型土坑 S K887 から平安中期（10世紀）の土師器が出土していることも、この推定と矛盾しない。

最初の修理の時期 復弁蓮華文軒丸瓦 XIV には、外縁上面に范型に残された鑿痕を写し取った XIV a (Fig.38-9) と、外縁の鑿痕を削り落として平滑にし、中房蓮子を大きく彫り直した XIV b (11) がある。XIV b では范型に傷があるし、後にひび割れも生じている (12)。両者の外縁はともに素文であるが、XIV a の外縁の鑿痕はそれ以前にあった鋸齒文を削り落としたものではないか、という可能性を残す。さらに XIV b では、外縁と顎部下半に鋸齒文を焼成前に篋書きした個体が初めて 1 点みつけた (11・P L.15)。これは外縁に鋸齒文のある軒丸瓦を知っていた瓦工人が描いたのである。しかし、弁は平板化し、白鳳期の弁の優美さを失いつつある。したがって、XIV 型式で講堂の屋根を葺き替えた時期は、従来の指摘通り奈良時代初頭頃が候補にあげられよう。

飛鳥寺講堂の衰退・廃絶と北側の整地

その後来迎寺の造営を契機に行われた整地、つまり講堂基壇北側の埋め立ての際に、不要となった講堂の大量の瓦を土器とともに投棄している (Fig.40)。ここに平安後期以後室町時代までの瓦がなく、土器は室町時代中期（14～15世紀）のものが最新なので、講堂の衰退・廃絶時期は平安後期以後のある段階であり、室町時代に整地が行われたと推定される。

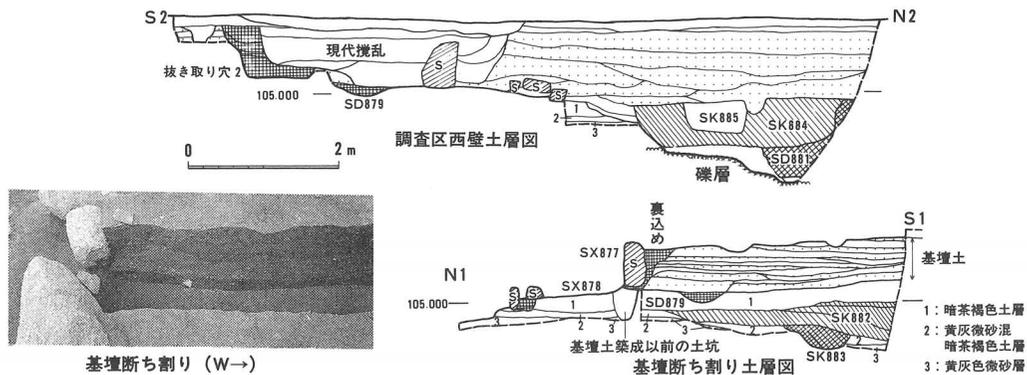


Fig.40 調査区西壁・基壇断ち割り土層図 (1 : 100)

飛鳥寺講堂創建以前の遺構

基壇断ち割り調査などの土層の検討によれば、基壇土直下に暗茶褐色土層があり、以下黄灰色微砂混じり暗茶褐色土層、黄灰色微砂層（更新世の堆積物）の順で礫層に達する（Fig.40）。

東西溝 S D 880・881 犬走りの北側にある S D 880は、幅25cm、深さ25cmの石組溝である。石組の敷設に先立って、幅1m、深さ75cmの掘形 S D 881を掘っている（P L.16）。これは調査区東端で講堂犬走りの下にもぐることから、講堂創建時期より古い。石組溝の石は講堂創建時にほとんど抜き取られており、一部の底石と側石を残すだけである。S D 880の東西方位は講堂と明らかに異なる。飛鳥寺内で S D 880の東西方位の振れに近い遺構を挙げれば、第1次調査時に南門の南で発見された南方石敷広場の北の縁石の東西方位の振れ（東で南へ7° 58' 50"）である。『飛鳥寺発掘調査報告』では南方石敷広場の北の縁石の東西方位の振れについて、当時の条里との関連を可能性のひとつに挙げているが、いまだ解明されていない。S D 880の東西のレベル差からみて、東から西へ水を流していたと推定できる。調査区の東西の外側には S D 880の続きとそれに連なる遺構があるはずであり、将来の付近での調査を待ちたい。

古墳時代以前の遺構 基壇断ち割り調査によって、少なくとも黄灰色微砂混じり暗茶褐色土層から掘り込まれた土坑 S K 882を検出した。この埋土からは5世紀の土器が出土した。さらにこの下位から、S K 882に壊された溝状遺構 S X 883が見つかった。地山の黄灰色微砂層は南へ向かって緩やかに傾斜している。基壇の残りが良好であり、断ち割り調査の幅を80cmに制限したので、結果として古墳時代以前の遺構の把握は不十分なものとならざるをえなかった。ほかに縄文土器片も出土したので、付近に縄文時代の遺構があったのだろう。

まとめ

①講堂基壇土は比較的良好に保存されていたが、その東北隅は確定できなかった。②講堂の東西中軸線が中心伽藍の中軸線に対し北で西へ振れることを再確認した。③飛鳥時代創建の講堂は、奈良時代初頭頃に屋根瓦を大きく葺き替え、平安中期までは修理され、建っていた。④軒平瓦は一貫して葺かなかった。

B 1993-1 次調査

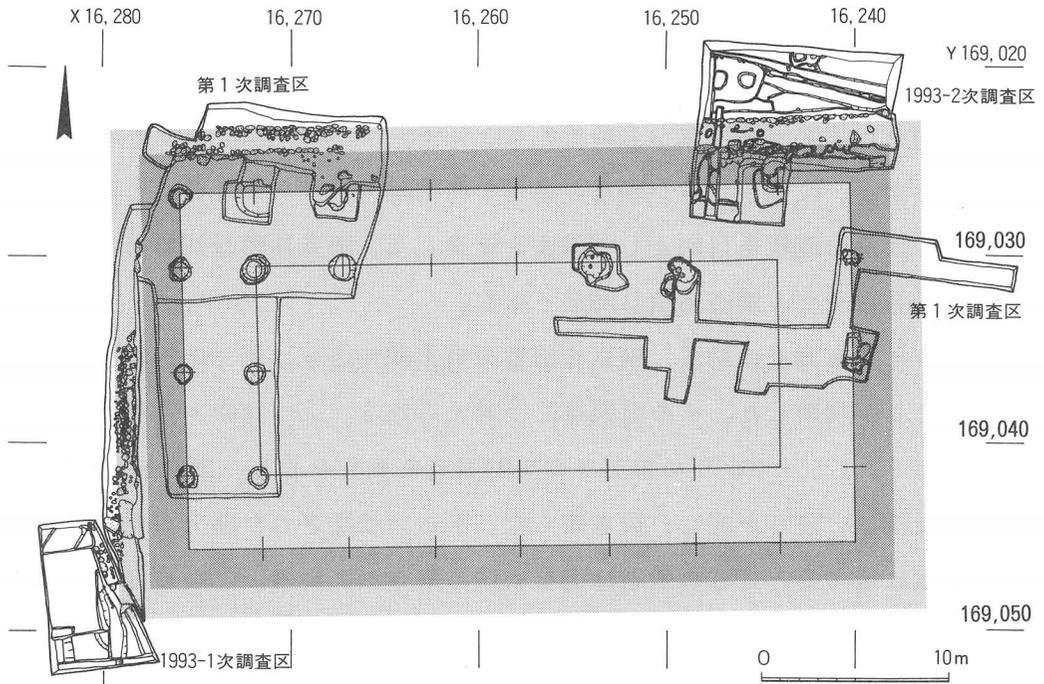
(1993年5月～6月)

この調査は住宅改築に伴うものである。1956～1957年の飛鳥寺の発掘調査結果に照らすと、改築予定地が飛鳥寺講堂の西南隅犬走りにあたることから、地下遺構の状況の確認を目的として調査を実施した。調査期間は1993年5月31日から6月8日まで、調査面積は36㎡である。

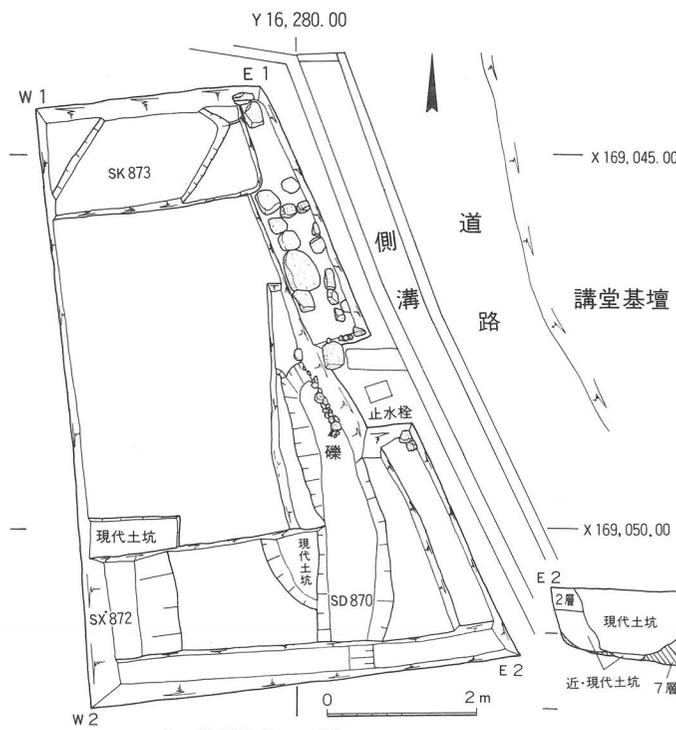
手掘りによる調査の結果、飛鳥寺講堂の東南隅犬走りはすでに旧状を留めていないことが判明した。その原因は二つ考えられる。一つは中・近世の部分的破壊である。1956～1957年の飛鳥寺の発掘調査結果をみても、講堂の西側犬走りの石は南ほど残りが悪く、抜き取られ、あるいは乱された部分が多い。とくに西南隅に接するところの敷石は完全に抜き取られている。二つめは調査地東を南北に通るコンクリート製道路側溝が、1956～1957年の調査後に設置された際の破壊である。

さらに基本層序と下層遺構の確認のために、調査区の北から幅1.2mと南から幅2mの範囲を地山（無遺物層）まで掘り下げた。基本層序は上から1、2層が現代の整地層、3層は室町時代の軒平瓦が出土したので中・近世の地層、4層と5層は古代の遺物包含層である。6層以下の地山層も3枚あり、6層は明灰褐色土層、7層は緑灰色砂層、8層は礫層である。

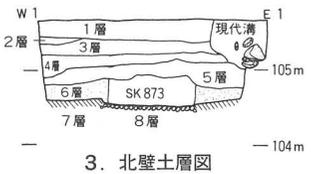
調査区南西隅では4層直下でコンテナ10箱分の丸・平瓦を廃棄した土坑SK871を検出した。SK871の下からは土坑か溝SX872の東肩を検出した。溝だとすると、調査区北ではその延長部分が検出されていないので、途中で西に曲がっていることになる。埋土には古代の遺物を含む。さらに調査区南側では講堂の南北方位に平行する溝SD870を検出し、その行方を追究したところ、東へ折れ曲がるか、途中で途切れると判断されたが、止水栓が埋設されており、それ以上の調査はできなかった。SD870の北端からは拳大の礫が若干出土した。調査区北側では、6層上面で北東-南西に長軸方向をとる長方形の土坑SK873を検出したが、遺物はない。以上3つの遺構は古代のものだが、その詳細な時期、性格ともに明らかでない。



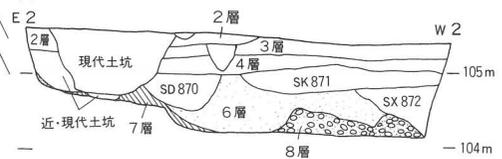
1. 調査位置図 (1 : 400)



2. 遺構図 (1 : 100)



3. 北壁土層図



4. 南壁土層図

Fig.41 飛鳥寺 1993-1次調査位置・遺構・土層図

2 奥山・久米寺1992-1次調査

(1993年2月)

この調査は、民家の改築に伴い高市郡明日香村大字奥山で行ったものである。調査地は1972年に西面回廊を検出した地点(『概報』3)から北へ約30m離れた民家の中庭で、回廊基壇の存在が予想される位置にあたる。東西7.5m、南北3mの発掘区を設けて調査を実施した。遺構面は浅く、表土とその下の旧耕土を除去すると20cmから50cmの深さで西回廊の基壇築成に使われた黄褐色山土層があらわれた。しかし、基壇上は民家の建設と畑の耕作による削平と攪乱をかなり受けており、礎石位置はもちろん、基壇化粧の存在も明らかにしえなかった。また、瓦片の散布もほとんどみられず、旧境内面は完全に削平されていることが判明した。ただ、基壇築成に伴う掘り込み地業の東端が削平を逃れてかろうじて残っており、回廊基壇の掘り込み地業の幅が東西6.5m以上に及び、深さも35cm以上であることを確認した。なお、この掘り込み地業は古墳時代の土師器・須恵器小片をふくむ暗灰褐色砂質土上面から掘り込んでいる。

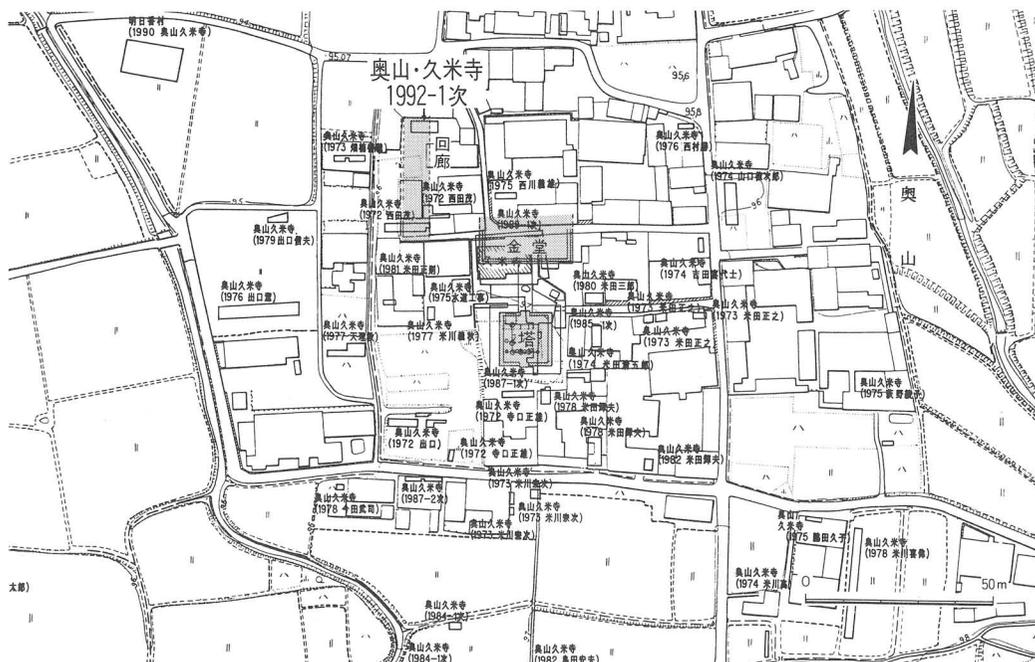


Fig. 42 奥山・久米寺 1992-1次調査位置図 (1 : 2000)

3 川原寺1993-1次調査

(1993年5月)

本調査は住宅建替に伴うものである。改築予定地が川原寺西僧房に隣接することから、地下遺構の有無の確認を目的として調査を実施した。調査期間は1993年5月24日から同年5月26日まで、調査面積は9 m²である。

手掘りによる調査は地表面から-1.6mまで行い、7枚の遺物包含層を確認した。1、2層は近代～幕末、3、4層は江戸～室町、5層は室町、6層は白鳳～室町、7層は白鳳～奈良時代の土器や瓦を含む。1～4層は江戸時代以降の整地層、5～7層は沼状の自然堆積を示す腐植層と砂層である。7層中に人頭大の礫が集中していたが、付近から廃棄されたものであろう。調査区の壁の崩壊が予想されたので、ここまでで手掘りによる調査を終了し、7層以下の地層を検土杖によって-1.6～-3.1m検査した。その結果、依然として腐植層と砂層の互層が連続し、泥炭状の地層に達することが確認できた。

調査地北側の板蓋神社のある丘とその西側にある丘の間が谷地形をなす。したがって、本調査地は川原寺創建前は自然流路か沼地で、創建後に西北の谷からの流水を伽藍内に進入するのを防止する施設の存在が付近に予想される。

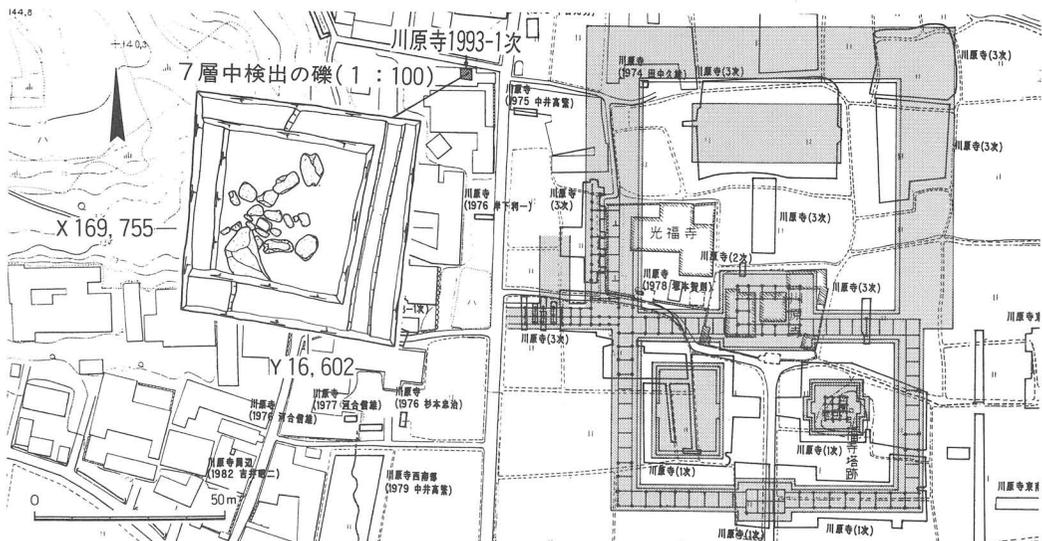


Fig.43 川原寺 1993-1次調査位置図 (1:2000)

4 山田道第6次調査

(1993年7月)

この調査は、県道「榎原神宮東口停車場飛鳥線」の拡幅工事に伴う事前調査として、高市郡明日香村奥山・雷において1988年（山田道第1次調査）から行ってきた。現県道は古道山田道を踏襲しているという推定がある。第1～5次調査は拡幅工事予定地の北半を主な対象とし、縄文時代晩期以降の連綿たる生活の痕跡を検出した。その成果の概略は『概報』20～『概報』23ですでに報告している。そのなかでとくに第2～4次調査検出のSD2540と第5次調査検出のSD2800が、山田道の北側溝の可能性のあることを、つぎに奈良時代の軒瓦の存在が、付近に該期の小治田宮があった可能性を示すことなどを指摘した。今回は県道拡幅工事予定地の南半を調査対象とし、雷丘側から東へ向かってA～E5つの調査区を設けて、第1～5次調査検出の重要遺構の南への続きと山田道関連の遺構の検出などを目指した（Fig.44）。総面積は282.5㎡である。

A区の調査（Fig.45）

A区は雷丘交差点の東30m、山田道第5次調査地の南に位置し、東西7m、南北2.6mの面積18.2㎡で設定した。A区では第5次調査検出のSD2800に対応する東西溝やいわゆる粘土採掘坑の存在、さらにA区南で検出されてきた推定小治田宮関連遺構の北への続きの発見も予想された。

A区の層序は現道路面から盛土（厚さ50cm）、旧道路面・盛土（30cm）、旧耕土・床土（25cm）、砂混じり明茶褐色土・砂混じり茶褐色土層（15～20cm）を経て、淡黄灰色粘土層（地山）の遺構面に達する。土層の堆積状況は第5次調査地と同様である。遺構面にSD2800に対応する東西溝はなかったが、第5次調査地から連続する粘土採掘坑を5基検出した。粘土採掘坑は開口部が一辺65～100cmの正方形で、縦断面は台形を呈する。淡黄灰色粘土層と粘土採掘坑の埋土は灰色砂を含み、さらに時期的に水が沸きやすく、粘土採掘坑の壁はすぐ崩壊したので、完掘できなかった。採掘坑の埋土上部からは、時期を特定できる遺物は出土しなかった。

B 区の調査 (Fig.46)

B 区は A 区の東 35m、第 3 次調査地の南に位置し、東西 21m、南北 4 m の面積 84㎡で設定した。層序は現道路面から盛土(90cm)、旧道路敷(5～15cm)、旧耕土・床土(25cm)を経て、最初の遺構面に達する。

まず B 区西端から 2 m の範囲で、灰色砂質土層の上に人頭大の礫を用いた礫敷を検出した。これは第 3 次調査検出の礫敷 S X 2633 と一連の可能性がある。つぎに茶灰色砂質土層(20～30cm)を除去し、黒褐色粘土層上面で第 3 次調査で検出した 3 つの遺構、すなわち谷地形の西肩 S X 2630、南北溝 S D 2624・2625 が南へ続くことを確認したが、山田道北側溝候補 S D 2540 に対応する東西溝はなかった。S D 2625 は幅約 1 m、深さ 20cm で、埋土はバラス混じりの灰色粗砂である。S D 2624 は幅約 1 m、深さ 25cm で、東西兩岸の護岸用に渡した板などを支えた木杭が 30～40cm 間隔で残っていたが、板自体は残っていなかった。埋土は灰色粗砂である。この位置はその後自然流路が踏襲し、幅 3 m 以上の範囲に、運搬された砂や粘土が堆積していた。ここから奈良時代の獣脚付盤や奈良時代の軒丸瓦 6011 (難波宮と同範か)、6134 (新型式か) が各 1 点と軒平瓦 6691F が 2 点出土した。南北溝 S D 2624・2625 は藤原京条坊南北計画線に平行であり、7 世紀末から 8 世紀のものであるという従来の知見を再確認した。

さらに S X 2630 の埋土の堆積状況と包含された遺物を知るために、4 m² の範囲で砂混じり黒褐色粘土層から深掘りを行った。黒褐色粘土層は厚さ 30cm で、7 世紀末の丸・平瓦と土器を含む。その下位の砂混じり暗褐色粘土層は厚さ 20cm で、7 世紀の土器片と木製横櫛 1 点が出土した。さらに下層には砂混じり植物遺体層とその直下に灰色細砂層があり、S X 2630 は旧河川の西肩であることが判明した。この調査段階で、多量の水が沸き出し、調査区の壁面が崩壊する恐れがあったので、調査を終了した。

C 区の調査 (Fig.47)

C 区は B 区の東約 43m、第 2 次調査地西区の南に位置し、東西 15.5 m、南北 3.6m の面積 55.8㎡で設定した。層序は現道路面から盛土(厚さ 60cm)、旧耕土・

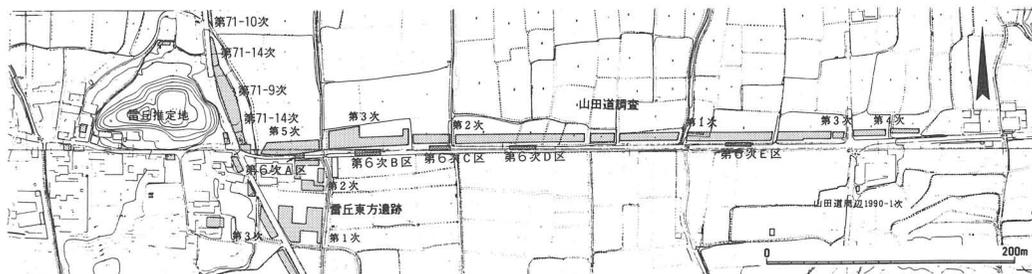


Fig.44 山田道第6次調査位置図 (1 : 6000)

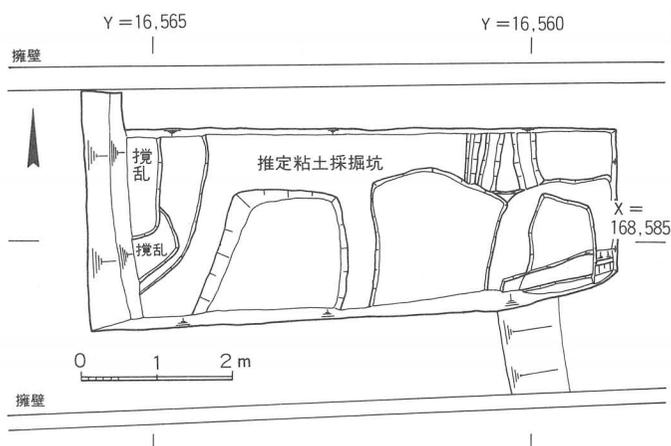


Fig.45 A区遺構図 (1 : 100)

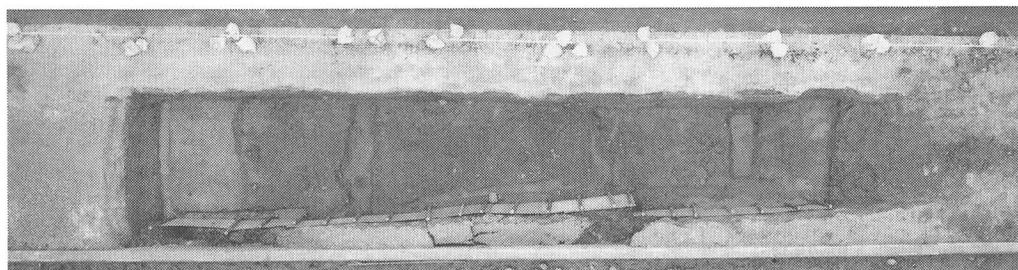
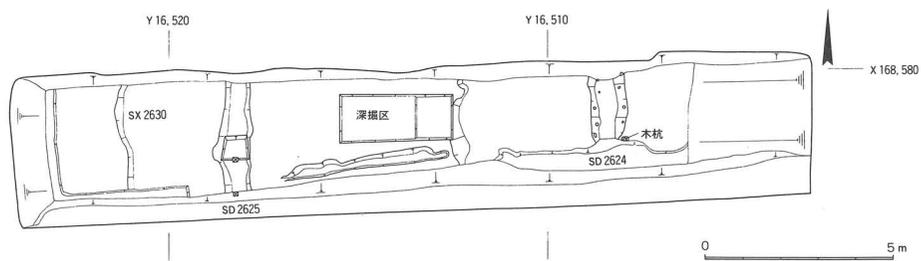


Fig.46 B区遺構図 (1 : 200)

床土（15～20cm）、砂混じり青灰色粘土層（20cm）、暗灰色粗砂層（5cm）で、これらを除去したところで、人頭大の礫からなる礫敷 S X 2980 となった。これは C 区北端で近・現代の溝か水田に切られている。北の第 2 次調査地ではみつからないので、そこまでは広がらない。調査区南側には幅 1 m 以上、深さ 20cm の落ち込みがあり、ここは礫が希薄である。この落ち込みは本来東西溝であった可能性もあるが、コンクリート擁壁があるため、南肩の調査ができず、断定はできない。S X 2980 の性格と所属時期はいまのところ不明である。

S X 2980 の下位の土層堆積の状況を知るために、調査区東端で部分的な深掘りを行った結果、S X 2980 直下には厚さ 50cm の暗茶灰色ないし暗青灰色粘質土層があり、砂や植物遺体を含む。さらに黒灰色粘土層（20cm）を経て、灰色砂層に達した段階で多量の水が沸き出し、調査の続行を断念した。調査区埋め戻しに先立ち、検土杖で灰色砂層以下の土層を検査した結果、灰色砂層は厚さ 1 m あり、その下は礫層であることが判明した。これは古い河川の存在を示すものであるが、B 区検出の旧河川 S X 2630 と一連か、別の河川かは不明である。

D 区の調査 (Fig.48)

D 区は C 区の東 50m、第 2 次調査地東区の南に位置し、東西 22.5m、南北 3m の面積 67.5 m^2 で設定した。この調査の主目的は、第 2 次調査地東区中央でみついている旧河川 S D 2570 の南延長部の検出である。層序は第 2 次調査地と同じで、現道路面下約 1 m で明緑灰色粘土（地山）に達した。この層の上面で S D 2570 と複数の小穴を検出した。小穴は建物としてはまとまらない。本調査区における S D 2570 の幅は 2.5m、深さ 0.7m で、第 2 次調査地に比べて狭くなっていた。S D 2570 の堆積層は上から淡灰色粗砂、暗灰色粘土、礫混じり灰色砂の 3 層からなり、各層からは第 2 次調査地と同様に布留式土器や韓式土器などが出土した。ただし、遺物の総量は第 2 次調査地に比べてはるかに少ない。

E 区の調査 (Fig.49)

E 区は D 区の東 155m、第 1 次調査地の南に位置し、東西 19m、南北 3 m の

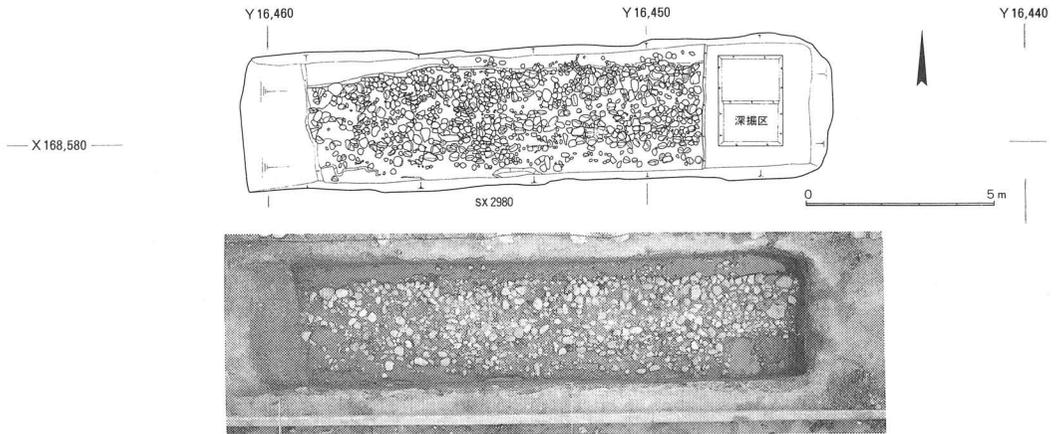


Fig.47 C区遺構図 (1 : 200)

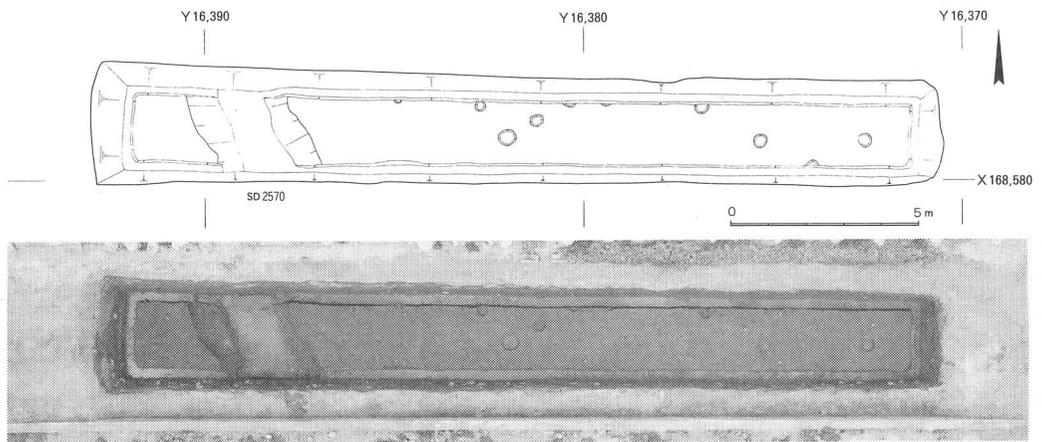


Fig.48 D区遺構図 (1 : 200)

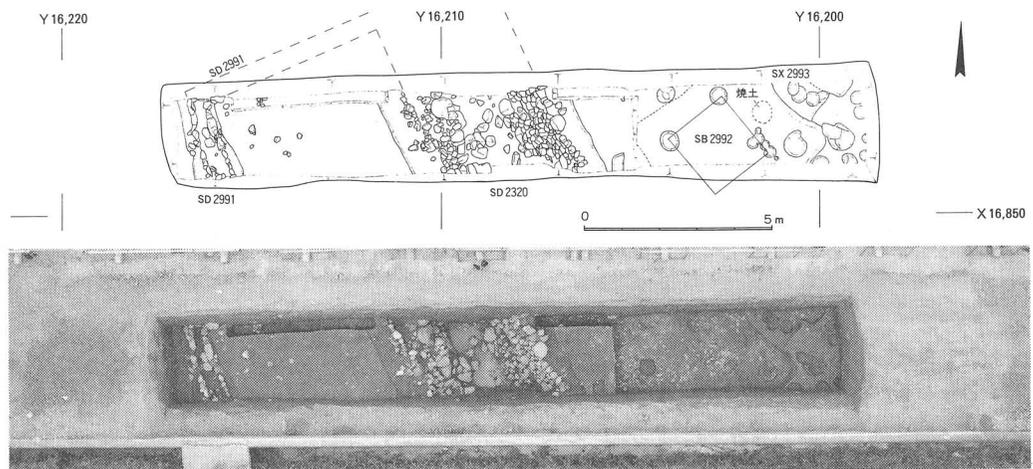


Fig.49 E区遺構図 (1 : 200)

面積57cm²で設定した。層序は、現道路面から盛土（厚さ20～30cm）、旧道路盛土（20～30cm）、旧耕土・床土（50cm）、暗灰色土層である。暗灰色土層上面で東西・南北方向のいわゆる耕作溝を検出した。つぎに厚さ約20cmの暗灰色土層を除去すると、第2次調査地検出のS D 2320の南の続きが現れた。この東側の石積の護岸は完全に旧状を留めていたが、西岸の石積は上部が裏込めも含めて崩壊していた。溝幅は本来約3mに復元できる。溝両肩の縁石の外側約50cmのところ掘形があり、あいだを小礫と土とで裏込めしていた。溝底は幅1.2mで、礫を敷く。その上にはこれが溝として機能していたときに堆積した20～30cmの砂があり、飛鳥Ⅰの土器が出土した。S D 2320の使用期間の一端を示すものである。その後この溝は暗褐色土（80cm）と淡黄灰褐色土（40cm）で埋め戻されている。さらに調査区西端ではS D 2320と同一面で、幅30cmの石組溝S D 2990を検出した。これはS D 2320と同様に北で西に振れた後、調査区北壁で東へほぼ直角に曲がる（S D 2991）ことが判明した。第2次調査ではこれらの溝に連なるものがないので、S D 2991はその後S D 2320に流れ込むと推定される。

このほか調査区の東では、下位の淡黒褐色土を除去すると、古墳時代の竪穴住居1棟（S B 2992）と竪穴住居状の落ち込み（S X 2993）、さらに複数の土坑を検出した。S B 2992は4本の柱穴をもち、北壁付近に炉（焼土）がある。E区に北接する第1次調査地Ⅱ区にも同規模の竪穴住居S B 2290があり、それらと一連の遺構であろう。なお淡黒褐色土の下位は礫層であった。

第6次調査のまとめ

第1～5次調査の成果を、ほぼ再確認することになった。しかし、古道山田道の北側溝の可能性が指摘されたS D 2540・2800に対応する東西溝、すなわち南側溝は、本調査地A～E区になかった。第71-9・10・14次調査（本概報p. 51～72）でも述べたように、雷丘の東方は小治田宮の推定がなされている。この問題と山田道の位置の確定は、今後の重要課題として残されている。なお、現在の地形と土層の観察とを総合すると、雷丘から奥山にかけての県道付近には、かつて南から北に流れる小規模の自然河川が数条あったことも判明した。

5 石神遺跡第12次調査

(1993年7月～1994年1月)

1981(昭和56)年に始まった石神遺跡の発掘調査は、今回で12回目を迎えた。第9次調査までは旧飛鳥小学校の東側の水田を一筆ずつ調査してきた。一昨年度の第10次調査からは、飛鳥幼稚園(旧飛鳥小学校)の敷地を対象として調査を行ってきた。今回の第12次調査はその3回目に当たる。

調査地は第4・5次調査区の西で、第10・11次調査区をはさんで水落遺跡の北方にあたり、小字名は唐木である。今回の調査では第10次調査区の北端部分を幅2mにわたって再発掘したので、調査面積は730㎡となった。また第1次調査からの調査総面積は12,500㎡となり、その結果、遺跡の規模は南北160m以上、東西140m以上に及び、さらに北と東・西へ広がることが分かっている。

1 従来の調査成果と時期区分

従来の調査では、主に7世紀中頃から8世紀前半に及ぶ時期に属する多数の遺構が検出され、それらはおおむねA期～D期の4期に分けられている。

A期(7世紀中頃：斉明朝) 飛鳥寺の寺域の北に東西大垣が作られ、その北方に石神遺跡、南方に水落遺跡が営まれる。石敷の広場や複雑に流れる石組溝、石敷をめぐる井戸など多数の遺構があり、長廊状の建物で画された区画が東西に並ぶ(東区画の規模は外周で東西24.7m、南北49.4m、西区画は東西42m以上、南北108m)。

B期(7世紀後半：天武朝) A期の遺構が取り壊され、焼土混じりの土で整地を行ない、南北塀で画した多数の空間を作り、その中に総柱建物や南北棟建物が配置される。

C期(7世紀末～8世紀初頭：藤原宮期) B期の遺構は全て取り壊され、整地を行なって、掘立柱塀で囲まれた大規模な区画を設け(南北72m、東西61m以上)、区画の内外に比較的小規模な建物が建てられる。

D期(8世紀前半：奈良時代) C期の遺構は全て取り壊され、小規模な建物や井戸が造られる。

2 層 序

調査区の基本的な層序は、上から校庭造成に伴う盛土、耕作土、床土、含炭褐色土、赤褐色土で、その下が礫敷あるいは橙褐色粘土・黒褐色粘土・黄褐色山土の整地土となる。遺構の大部分はこれらの上面で検出したが、校舎建築に伴う基礎工事などによって攪乱を蒙ったところでは、礫敷下の石敷や下層の礫敷などが露出し、その下は地山である灰褐色砂礫あるいは灰褐色砂質土となる。遺構面は全体に東南が高く、西北に緩やかに傾斜している。

3 遺 構

検出した主な遺構には、掘立柱建物 6 棟、掘立柱塀 2 条、溝 12 条、石敷 3 面・礫敷 6 面があり、ほかに多数の土坑や柱穴を検出した (Fig.50)。これらは層位関係と重複関係から大きく 4 時期に分けられ、そのうち二番目の時期以降が従来の時期区分 A 期 (斉明朝)、B 期 (天武朝)、C 期 (藤原宮期) の三期に対応し、最も古い時期は A 期以前に遡る。

A 期以前

溝 3 条と礫敷 3 面がある。これらはいずれも A 期の遺構の下層で検出した。この時期の遺構はいずれも北で大きく東に振れ、互いに平行または直行している。なおこれらの石組溝や礫敷には遺物が少なく、その正確な時期を決定しがたい。

S D 1840 は調査区の東南部で検出した斜行する石組溝で、両側に 1 石を立てて側石としただけで底石はない。幅は内法で 45cm、深さは 25cm あり、北で東に 30 度振れる。

S D 1920 は調査区の西北部で検出した斜行する石組溝で、底石はなく、両側に 1 石を立てて側石とする。幅は内法で 30cm、深さは 10cm で、北で東に 22 度ほど振れる。

S D 1930 は調査区西北隅にある斜行する石組溝で、底石はなく両側に 1 石を立てるだけである。幅は内法で 20cm、深さは 15cm で、北で東に 30 度ほど振れる。

S D 1840・1920・1930 の 3 条の石組溝は、いずれも側石を据えた掘形が見つからず整地と同時に築かれたと考えられ、また A 期の遺構の下へ潜ってゆくなど、検出の状況や規模・構造あるいは構築方法の点で共通する。第 6 次調査で

も S D 1840 の東北延長上のやや東にずれた位置で A 期に先行する斜行石組溝 S D 1030 を検出している。S D 1030 も S D 1840・1920・1930 と上記のような点で共通し、同時期の可能性があることから、A 期以前に遡る時期の遺構がさらに今回の調査区外へも広がると考えられる。

S D 1840 と S D 1920 のあいだには 3 面の礫敷、東から S X 1855・1885・1895 が広がる。礫敷はいずれも部分的に残るに過ぎず、その規模は明かでないが、S X 1855 は東西 6.3m 以上、南北 4 m 以上、S X 1885 は東西 1.7m 以上、南北 3.5 m 以上、S X 1895 は東西 4.5m、南北 12m 以上の広がりをもつ。S X 1855 は南辺、S X 1885 は東辺、S X 1895 は南辺と東辺に、それぞれ長さ 20cm 前後の石を並べて見切りとしている。

S X 1855・1885・1895 はおおむね平坦で、S X 1855 と S X 1885 とのあいだではほとんど比高差がないが、S X 1895 はこれらより 10cm 低くなっており、これらの礫敷は西に位置する飛鳥川へ向かって次第に低くなってゆくように平坦面を構築したものと考えられる。

A 期

掘立柱建物 4 棟、掘立柱塀 1 条、溝 9 条、石敷 3 面、礫敷 3 面がある。重複関係や層位関係からさらに Aa 期～Ad 期の 4 小期に分けることができる。

A a 期 調査区の西北隅で南北に等間隔で並ぶ 4 個の柱穴を東西 2 列検出した。これらに伴う柱穴は他に検出できず、今回検出した 2 列 8 個の柱穴は東西棟建物 S B 1940 の東庇部分に当たると思われるが、その形式や規模は不明である。柱間寸法は南北が 2.1m、東西は 1.8m である。

A b 期 S B 1910 は調査区の西北部で検出した桁行 4 間以上、梁間 2 間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行 2.1m 等間、梁間 2.6m 等間である。柱抜き取り穴と掘形とを検出した整地土の層位が異なることから、柱を立てたのち床面を盛土して低い基壇を築いたと思われる。

S X 1915 は S B 1910 の西方及び西南方に広がる石敷で、S B 1910 の西辺に沿って南北にやや大きめの石を並べて見切りとし、西に向かって緩く傾斜する。見切りの石は 1 石がやや斜めに傾斜を付けて据えられただけである。また石敷が

S B 1910の柱掘形を覆っていることから、S B 1910の建築後S X 1915が敷かれたことになる。石敷の範囲は東西4.5m以上、南北8.5m以上である。

S D 1945は北で東に5度振れる南北石組溝で、両側に1石を立てるだけで底石はなく、南端には東西方向に1石を置き塞いでいる。幅は内法で20cm、深さは10cmである。

A c 期 S X 1890は調査区の中央部で検出した礫敷で、東西7m、南北7mの範囲で確認した。礫は10cm内外の大きさのものを1石敷いているが、北端から約50cm南には20cmほどのやや大きめの石を東西に並べて見切りとし、これより北は10cmほど低くして礫を敷いている。なおこの礫敷に伴う建物遺構は今回の調査では見つからなかった。

S D 1860は調査区南寄りで検出した幅1.4m以上、深さ45cmの素掘りの東西溝で、調査区外西方へ延びるが、南北溝S D 1625・297を越えて東へは延びない。

調査区の西南隅ではA c 期とA d 期のあいだに東西棟建物S B 1941が建てられた。S B 1941は礫敷S X 1880を除去して検出した桁行2間以上、梁間2間の建物で、北で約10度東に振れる。柱間寸法は桁行が1.5m、梁間が1.7m等間である。柱抜取穴は径10cmほどと細く、仮設の建物であった可能性が高い。

この他調査区の東辺部ではA d 期の石敷S X 1706より古い柱穴を多数検出したが、今回の調査区内では建物や塀としてまとまらない。

A d 期 この時期には、S A 1705を東の限りとしてその内部に大型の建物S B 1900を置き、その外周に石敷S X 1706・1709をめぐる時期と、石敷に代わってそれを厚い礫層で覆って造った礫敷S X 1880・1875のめぐる時期とがある。

S B 1900は調査区の西北部にある桁行7間以上、梁間3間の身舎の東西と南に庇を付けた東西棟建物で、石神遺跡と水落遺跡を南北に分ける東西大垣から40mほど北にある。西妻部分は調査区外西方にあるため、規模を確定し得ないが、身舎の桁行が7間であるとすると、建物の中心はA期の西区画の東および南外周からほぼ等距離(35.4m)の位置にくるから、桁行7間、梁間3間の身舎の周囲に庇のめぐる建物であったと推定される。柱掘形は底のものが一辺約1.2mであるのに対して身舎では一辺約1.8mほどと大きく、またその深さも庇が70cm

に対して身舎は1.2mと深く掘られている。さらに身舎の柱掘形に重複が認められ、新しい掘形は、古い柱の抜き取り穴を埋め、さらに橙褐色粘土と黒褐色粘土を互層に積んだ整地を行ったのち、同じ位置で整地の上面から掘られ、また庇の柱掘形もこの整地の上面から掘られている。従ってS B 1900は当初桁行7間、梁間3間の規模で建てられ(S B 1900A)、のち身舎の規模はそのまま四面に庇のめぐる桁行9間、梁間5間の建物に建て替えられた(S B 1900B)ことになる。柱間寸法は桁行が2.5m等間、梁間が2 m等間、庇の出は2.4mで、柱の直径は30cmほどと推定される。なお建て替え後のS B 1900Bの柱はほとんどが垂直に引き抜かれ、抜き取り穴の中には多量の壁土と焼土が投棄されていた。

S A 1705は第11次調査区から延びてきた南北掘立柱塀で、S B 1900の東庇から5.4m東、S X 1706の西縁の見切りから1.3m西に位置する。今回9間分を確認し、柱間は15間となったが、さらに北へ延びる。北から2個目の柱穴から南へ5個、4間分の柱穴に掘形の重複が見られ、S B 1900とともにこの4間のみが建て替えられたと考えられる。柱間寸法は2.5m等間である。なお第11次調査区内ではS X 1706の西縁の見切りとS X 1709の東の見切りの間は10cmほど低くなっていたが、今回は確認できなかった。

S D 297・1625は水落遺跡から延びてきた木樋Hの抜き取り溝とそれを据え付けるための掘形の溝で、これらはさらに北方へ延びることが明らかとなった。木樋Hは水落遺跡の漏刻台(水時計)北辺から70m以上延びてきたことになる。

S D 297は幅60cm、深さ20cmほど、S D 1625は幅が1.2mで、深さはS D 297と同じである。底には木樋の痕跡やその固定に使用した粘土などを認めなかった。またS D 1625はS A 1705と重複し、これより新しいことと断面観察から、木樋の施工から破壊までの順序を、まずS A 1705の柱掘形を掘り、のちその西に沿って木樋の据えつけ溝(S D 1625)を掘って木樋を据え、埋め戻してそれを覆う整地を行い、その上に石を敷いた(S X 1709)。その後、石敷の上に礫が敷かれる(S X 1880)時期を経、これらを壊して溝(S D 297)を掘り、木樋を抜き取った、と推定できる。なおS D 297には石・礫とともに焼土が混ることから、木樋の抜き取りは周辺の建物が焼失したのちのことと考えられる。

S D 1713・1714は木樋Eを据え付けるための掘形の溝とそれを抜き取った時に掘られた溝で、既に第11次調査で検出していたが、今回第11次調査区の北辺部2mを重複して調査したため再検出したものである。幅はS D 1713が1.3～2.2m、S D 1714が75cm～1.2mで、深さは前回の調査ではS D 1713・1714とも同じ40cmとしたが、今回再検出したところ、S D 1713のみ1mと深いことが判明した。断面観察によれば、木樋の設置から破壊までの順序は次のように考えられる。すなわち、まず1mの深い掘形（S D 1713）を掘って深さ40cmまで砂や砂質土で水平に埋め戻し、そのち木樋を据え付け粘質土で版築状に丁寧に埋め戻し、その上に整地を行って石を敷き（S X 1709）、のちさらにその上に礫を厚く敷いている（S X 1880）。そしてS X 1709とS X 1880を壊して溝を穿ち木樋を抜き取り、それを焼土や石・礫混じりの土で埋めている。

S D 1850・1851は今回新たに確認した木樋の据えつけ溝とその抜き取り溝である。S D 1850は幅1.5m、深さ40cm、S D 1851は幅70cmで、深さはS D 1850と同じである。S D 1851の南北両岸には所々に石が据えられ、これらは木樋を固定する役目を果たしたと考えられる。S D 1850・1851の底は東西両端で比高差なくほとんど平坦であるが、木樋の水は西へ向かって流れたと考えられる。なおS D 1851はS D 297・1714と同様焼土混じりの石・礫で埋め立てられている。

S X 1845はS D 297・1625とS D 1713・1714の交点から北へ5mの位置にある不整形の土坑で、東西2.5m、南北2.3m、深さ40cmある。S D 297・1625とS D 1850・1851の接合地点に当たり、木樋の会所にあった枡のような施設の抜き取り穴で、周辺に凝灰岩の切石や粉が散っていることから、凝灰岩を用いた施設であったと考えられる。

S X 1709はS B 1900の南に広がる石敷で、第11次調査で南縁と東縁が検出されており、今回はその北縁を確認したことになる（P L.18）。北縁には見切りが設けられ、石敷は南にむかって緩く傾斜している。見切りの石がS B 1900の南庇の柱掘形を覆うことから、S B 1900AがS B 1900Bに建て替えられたのち、その外周に石敷がめぐらされたことになる。石敷の範囲は東西が20.6m以上で、南北は12m以上ある。石は整地した上に敷かれているが、のち大半が抜き取ら

れ、S X 1880によって覆われることになる。

S X 1706はS A 1705の東に広がる石敷で、第11次調査区から延びてきて、さらに北へ続く。調査区の北辺ではS X 1706の西縁で石を抜き取ったと思われる幅25cm、深さ10cmの南北溝S D 1870を検出した。これはS A 1705に対する見切りと考えられる。石敷の範囲は、東西が9.6m以上で、南北は36m以上にも及ぶ。S A 1705から東へ6mの位置には、ちょうどS D 277の北延長線を示すように、大きい石が南北に一直並び、これより東には人頭大の石が敷かれるのに対し、西にはやや小振りの石が敷かれる。また小振りの石が敷かれる部分には東西方向に石が並ぶ箇所があり、その間を石を敷く作業の一つの単位であったことを示唆する。

S X 1880はS X 1709を覆う礫敷で、焼土を含み、厚さは10～20cmである（P L.17）。S X 1709の北縁より30cm南にずらして東西に大きな河原石を並べ、礫敷の見切りとする。またS X 1875はS X 1706の上を覆う礫敷で、厚さは20cm内外であった。

B 期

掘立柱建物S B 1935のみがある。S B 1935は東西2間以上、南北2間の東西棟建物で、柱間寸法は桁行が2.4m、梁間が1.8m等間である。いずれの柱穴も焼土で埋められている。

C 期

掘立柱建物1棟、掘立柱塀1条があり、ともに北で西に2度振れる方位をもつ。このほかに多数検出した土坑のほとんどは、出土遺物や埋土（含炭褐色土）からみてこの時期に属すると考えられる。

S B 1905は東西4間、南北2間の東西棟建物で、柱間寸法は桁行が2.1m等間、梁間が1.9m等間である。

S A 1865は調査区北端部を横断する東西塀で、S B 1905の北3mにある。また第4・11両次の調査で検出した、C期の大規模な区画の南面を限る掘立柱塀S A 780から北へ17.6mの位置に当たる。柱穴は11間分を検出し、柱間寸法は2.4m等間であるが、東から2間目だけが3.2mと広い。

3 遺物

土器、瓦、金属製品、石製品、土製品がある。

土器は多量の須恵器と土師器のほかに、施釉陶器や東国系の黒色土器、さらに新羅土器が出土した。須恵器や土師器のなかには、篋記号や篋書きを施したものが36点ある。須恵器杯Bには、底部外面に「岡本」と篋書きしたものがある (Fig.51-1)。施釉陶器は深い椀形をした高杯の杯部で、2条の突起列と凹線をめぐらす。第11次調査で出土した類例からみて、緑色の鉛釉陶器であろう。新羅土器は細頸壺と推定される (Fig.51-2)。頸部に水滴形文と円弧文とを合成したスタンプ文を施す。これは7世紀後半～8世紀のものであろう。

瓦には四重弧文軒平瓦1点と極先瓦1点、若干の丸・平瓦がある程度である。

金属製品には釘、鏃、斧、鎌、刀子、鋸、紡錘車などの鉄製品が100点以上あり、種類については、これまでの調査で出土した内容と大差ない。

石製品には玉類のほかに、砥石、石包丁、石鏃、石製刺突具、磨製石剣、紡錘車、剥片石器がある。玉類には白玉や勾玉がある。白玉は滑石製であり、勾玉は硬玉製で、縄文時代のものである。このほかに、建築材料と考えられる凝灰岩質砂岩の切石や室生安山岩の板石、凝灰岩などが出土した。

土製品には円面硯、土馬の脚部、鞆の羽口、土製円板などがある。またS B 1800やS D 1851を中心に、赤褐色に焼けた壁土が多量に出土した。これらの壁土には、白土が上塗りしてある。

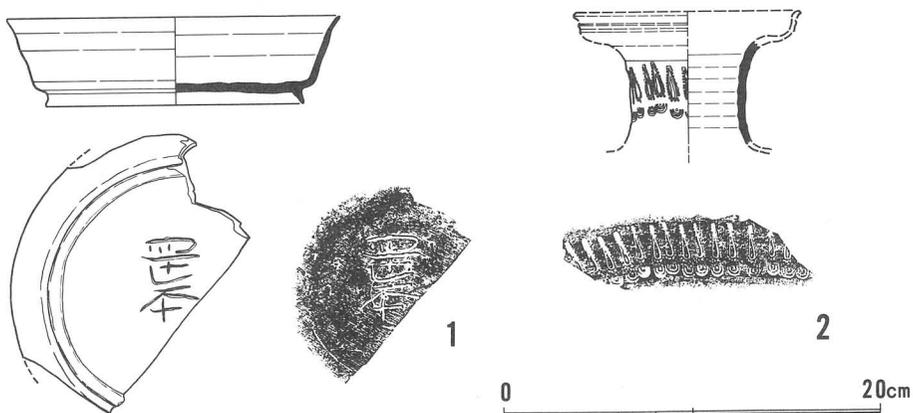


Fig.51 石神遺跡第12次調査出土土器 (1 : 4)

4 ま と め

A期 この時期については、第10・11次調査で、西区画の外周の規模が南北108mで、その内部には周りに石敷のある建物が建てられていたことが確認され、東区画に比べて、はるかに大規模かつ中枢的な施設であると推定された。今回の調査では、第10・11次調査での推定を積極的に裏付けるとともに、新たな調査成果が得られた (Fig.52)。

第一に、A期の遺構に少なくとも4期の重複のあることが判明し、従来A期をA1～A3の3小期に区分してきた考えを再検討する必要がでてきた。

第二に、A期でも最後のA d期に西区画の内部が整備され、四面に庇のめぐる大規模な建物SB1900Bが営まれ、その周囲には石敷SX1706・1709や礫敷SX1880・1875がめぐることが確認されたことによって、西区画の南部一帯に石敷・礫敷をともなう建物群が存在したことが明らかとなった。さらにSB

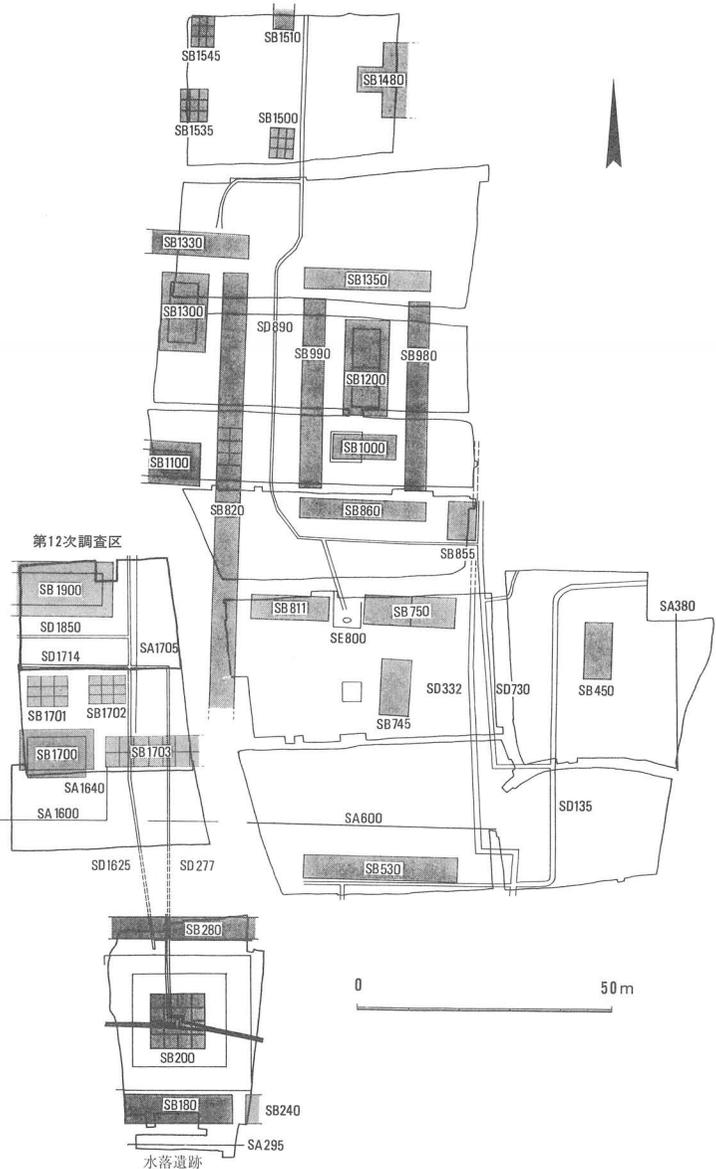


Fig.52 石神遺跡A期主要遺構配置図 (1 : 1500)

1900は長廊状建物を除くと石神遺跡で建物の形式として最高の格式と最大級の規模をもち、この区画の中心的な建物であると考えられる。

第三に、S B 1900の中心が区画の東及び南の外周から35.4mの位置にあり、またそれが第11次調査で検出した建物S B 1700の中軸線の北延長線上に当たる。これによって、区画外周の東西規模が70.8mで、南北長のほぼ三分の二に相当し、またS B 1900Bは中心が区画の南限から北へ区画の南北長のほぼ三分の一となる位置にくるように建てられていることがわかり、A d期の西区画が非常に規格性の高い計画的な配置のもとに造営されたことが明らかとなった。

第四に、水落遺跡から石神遺跡へと延びてきた2本の木樋のうち、木樋Hはさらに北へ延び、木樋Eが西へ折れ曲がることは、すでに第11次調査で確認されていた。しかし、今回第11次調査区から北へ延びてきた木樋Hは、さらに北へ延びることが明らかとなり、西区画の中央部に至る可能性が出てきた。また今回調査区の南辺近くで、この木樋から西へ折れ曲がる新たな木樋があることを確認した。水落遺跡から北へ流れる水の処理、あるいは再利用が、これまで予想されていた以上に複雑な形態で行われたことが考えられる。

C期 C期の遺構はS B 1905とS A 1865を検出するに止まったが、この時期の石神遺跡の構造を考える上で重要な知見を得た。今回の調査の結果、S A 1865の東端から2間目の柱間が広く、またここが第11次調査で検出した掘立柱塀で画された区画の南面を限るS A 780の東から15間目の柱間が広がっている部分のちょうど北延長上に位置することがわかった。この部分がこの区画の南面及びS A 1865の中央間に当たるとすると、掘立柱で画された区画の東西規模は70.6mとなり、この区画が東西70.6m（柱間総数29間で、ほぼ2.4m等間、ただし中央間のみ3.4mと広い）、南北70.6m（28間でほぼ2.5m等間）の正方形を呈すると推定できるようになった。そして、この区画は70.6m四方の規模で計画され、東面はそれを28間の偶数間としたが、南面については中央に出入口を設けるため29間の奇数間にし、中央間の柱間を広くしたことによって、その他の柱間は東面の柱間より狭くならざるを得なかったと推定される。またS A 1865はちょうどこの区画の南から四分の一に位置し、東面を画する掘立柱塀S A 781の南

から7間目と8間目のあいだの柱に取り付くと推定され、掘立柱で画された区画内部は規格性をもった割り付けが行われたことも判明した。なおこの区画が70.6m四方の規模をもつことは、藤原宮の東方官衙地区で確認した官衙区画の規模（東西約66m、南北約72m）に類似し、C期にも何らかの官衙に関連した施設が、ここに営まれたことを示唆する。

A期以前 また今回の調査の大きな成果とし

て、A期に先行し、A期と異なる造営方位をもつ礎敷や石組溝の存在を確認したことが挙げられる。これらと同様の方位をもつ遺構は、かつて今回の調査区の東北方で行われた第6次調査で検出し、また第3・4次調査でも埋土に少量ではあるが飛鳥寺の瓦を含む斜行素掘り溝SD575・576・577を検出していることから、A期に先行する時期の遺構が大きく広がっていると推測される。さらに飛鳥寺や石神遺跡の周辺でもこれらと同様の方位を示す遺構として、飛鳥寺南方石敷広場SX670・671とそれに伴う石組溝SD662、あるいは山田道第一次調査で検出した斜行石組溝SD2320などを検出しており、これらは6世紀末から7世紀前半に属すると考えられている。今回は出土遺物も少なく、その造営年代を明らかにできなかったが、あるいはこれらと同時期の可能性も考えられる。

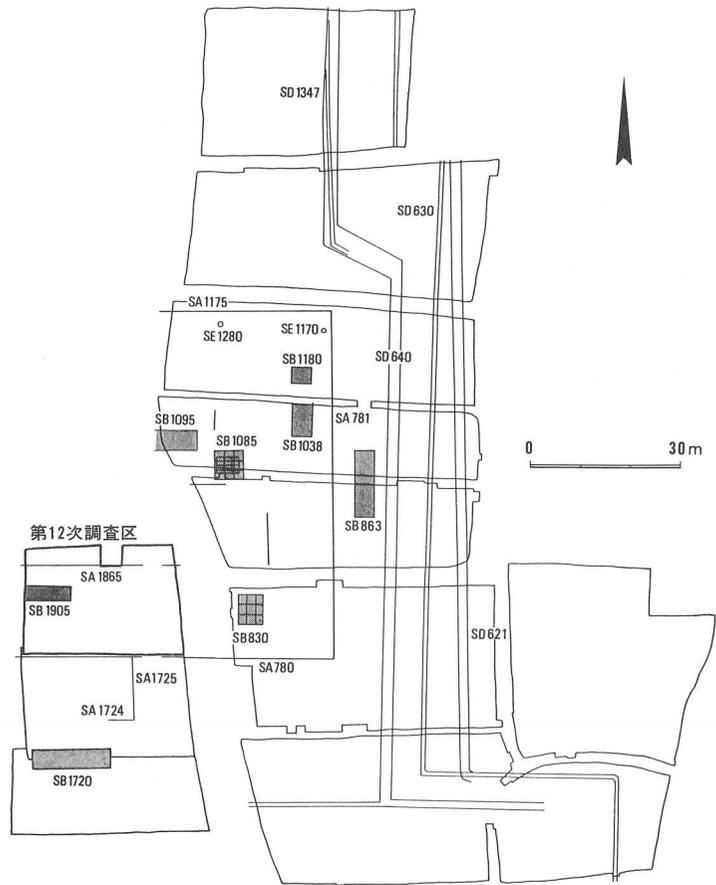


Fig.53 石神遺跡C期主要遺構配置図(1:1500)

6 甘樞丘東麓の調査（第71-11次）

（1993年12月）

明日香村の甘樞丘は、「古事記」垂仁紀などに登場する飛鳥の名山である。この丘の多くは公有化が進み、現在飛鳥国営公園として整備が進行している。本調査は、国営公園整備の一環として丘の東麓に一般登山者向けの駐車場計画があり、その予備調査として実施した。

調査期間は1993年12月20日から23日までの3日間。調査地は甘樞丘東麓の小支丘にはさまれた緩やかな傾斜地で、通称入鹿谷の南東外側にあたる。入鹿谷は、蘇我蝦夷、入鹿の邸宅があった（釈日本紀）と伝えるところ。地籍では明日香村川原地内となる。

開発対称面積は1,200㎡。西側の傾斜面を大幅に切土し、東側の低地部に土盛する計画であるので、切土対象地を中心に長辺4m、短辺3mの調査区を6ヵ所設けた（Fig.34）。表土は機械掘削し、遺物含有層以下は人力によって発掘した。以下、試掘坑には1～6区の番号を振る。

この結果、表土は浅いところでも0.7m、深いところでは1mを越し、全体に堆積の深いことが判明した。また、現在地表からは明らかでない東西方向の埋没谷を検出（1～3）した。下層の含有層や表土層の堆積のあり方からみて、現地形はそれほど古くは溯らず、むしろ近
・現代の改変によるものと思われる。各調査区には6世紀末から9世紀初頭にいたる土器、縄叩き整形の平瓦片などを含む遺物含有層があり、ことに1、2、4区に厚い堆積がみられた。また2区では、幅0.5mの東西溝の底に人頭大の石を並べた遺構を一部検出している。谷の排水に関わる施設の可能性もあるが、規模などは不詳であり、今後の本格的調査を待ちたい。

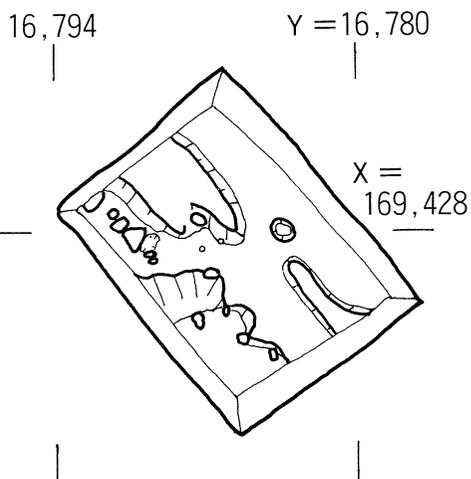


Fig.54 試掘坑2区遺構図（1：100）

7 上ノ井手遺跡1993-1次調査

(1993年10月)

飛鳥資料館の売札所の北側に便所および展示解説室を増築することとなり、事前の発掘調査を実施した。面積2.5㎡の調査区を2箇所設け、1993年10月5日から10月6日までの期間に調査を行った。

調査地は東から西へ流れる宮川の南岸にあたる。現地表面から下へ約2mは飛鳥資料館建設時の造成盛土で、その下に水田耕作土(厚さ約15cm)とその基盤土(厚さ約12cm)と続き、さらに下層は宮川の氾濫原と思われる砂層が不整合に入り交じりながら厚く堆積している。この砂層からは自然の流木片が多数出土した。

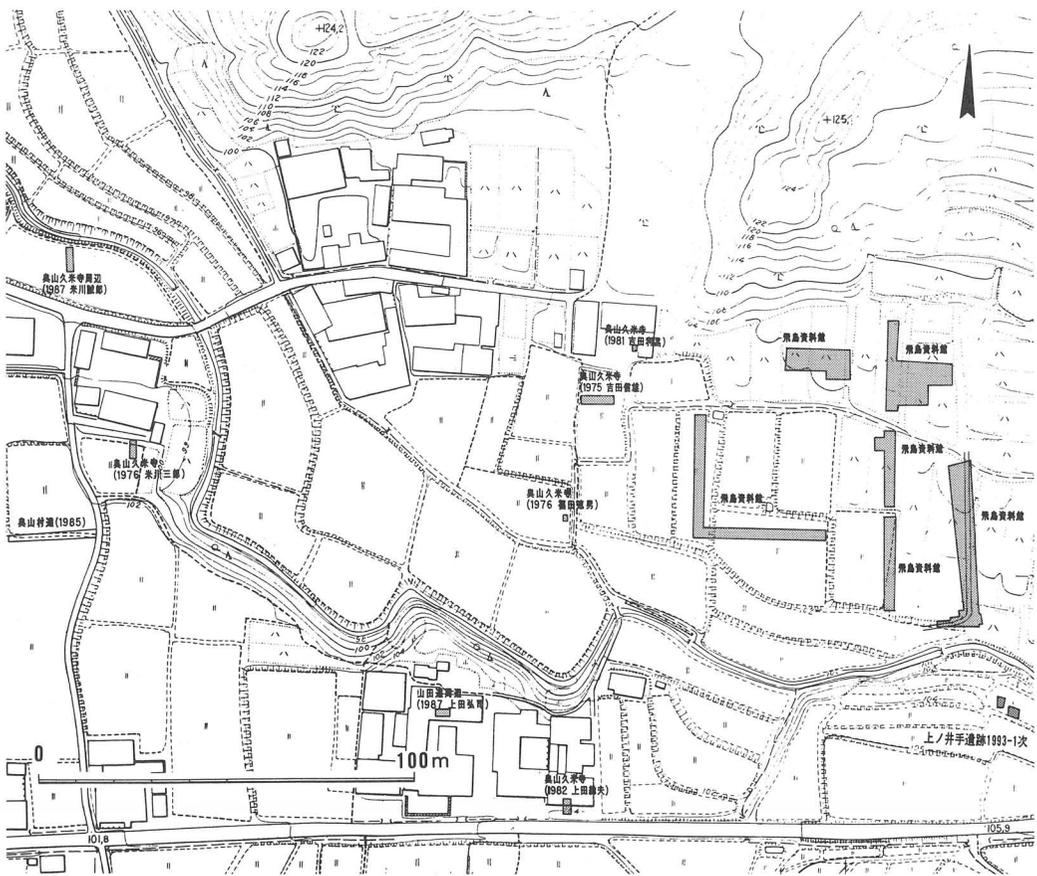


Fig.55 上ノ井手遺跡1993-1次調査位置図(1:2000)